# 学校から職業への移行場面における日本人大学生のキャリア選択様式の検討

小菅　清香

[キーワード：①学校から職業への移行　②大学生　③キャリア選択
④キャリア発達　⑤面接調査]

## 問題と目的

キャリア発達とは生涯を通して選択（choice）と適応（adjustment）を繰り返すことである（Carole, 1992）。選択に関して，かつての日本では，卒業時の進路選択さえ上首尾に行うことができれば，多少のことはあってもおおむね安定的な将来を見通すことができた（下村，2008）。しかし，従来とは比較にならないほどキャリアをめぐる環境変化のスピードが速くなっている現在，一時点の決定ではなく，その決定に至るプロセスに着目することが重要である。本論文は，学校から職業への移行場面で，日本人大学生のキャリア選択の様式にはどのような特徴があるかを検討するものである。

### １. キャリアの定義

1950年代，心理学においてキャリアを現在の意味で研究対象とした研究が始まった。「人間の働くという行動（human work activity）」を心理社会的現象として概念化し，測定しようとの研究である。その際，複雑な人間の職業行動を総合して表現する概念として用いられたのが「キャ

リア」という語であった（Jepsen&Choudhuri, 2001）。

キャリアの定義については，研究者により用いる文言が異なることから，多義的と捉えられがちである。しかし，様々な「キャリア」の定義を検討した渡辺（2007）は，その文言の違いを，研究者が「キャリア」を捉える際に重視する側面の違いであるとし，それら定義に共通する要素があることを示した。そこでの結論は，「キャリア」という語が「人と環境との相互作用の結果」「時間的流れ」「空間的広がり」「個別性」の意味を内包しているというものであった。

中でも，渡辺（2007）は，「個別性」という概念について，西欧の文化圏では人間観の根底にある思想であるためにあえて表現されることがない一方で，日本では従来の価値観のなかで焦点化されてこなかったと指摘する。しかし，「個別性（individuality）こそキャリアの概念を構成する不可欠で，最も重要な要素である（渡辺，2007）」（p.15）。

## ２. 日本における学校から職業への移行にみられる特徴

本節で特に強調したいのは，日本における学校から職業への移行は，世界の中でもかなり特殊な様相を呈しているという点である。

例えば，小方（2008）は，教育社会学の観点から，日本の当該場面には３つの特徴があると指摘する。その特徴とは「若年」「労働未経験」「早期就活」で表され，１）実際の仕事経験のない若者が，２）高校卒業後ただちに大学に進学する，３）大学生が卒業前に就職活動を行う，という現状を指している。すなわち，日本では，高校→大学→就職という「移行モード」が当たり前とされているが，この移行特性は欧州において必ずしも一般的ではないと述べる。

また，就職場面にも注目してみよう。かねてより，わが国の大卒労働市場には独特の慣行・制度が存在するがゆえに，ほとんどの大学生が程度の違いこそあれ，きわめて標準化・マニュアル化された就職活動を展開している（濱中，2007；日本労働政策研究・研修機構，2007）ことが

指摘されてきた。このマニュアルと揶揄される就職活動も，日本の特徴として挙げられるものである。

以上から，日本の学校から職業への移行場面において特徴的なのは，大多数の学生が，同じ時期に，同じように，同じ方向を目指して進んでいるようにみえる点であるといえる。

## ３．キャリア発達理論

キャリア発達を学習理論からアプローチしたKrumboltzは，選択の主体である個人に重きをおいた。Krumboltzは「学習し続ける存在としての人間」という考えを基盤に，キャリア意思決定に影響を与える要因のうち，学習経験の影響を特に重んじた。つまり，人は従来の行動を変化させる，新しい行動を獲得することにより，変化し続ける環境に適応していくことができるとの主張である。

しかし，近年のキャリア環境の激変に伴い，従来のキャリア発達理論が見直され，新たな理論が構築されている動向がある。その一つとしてここでは文脈理論をとりあげてみよう。文脈理論とは「社会的･経済的･政治的な要因，本人が置かれた社会的状況，自分では動かしにくい環境的な変数など，本人を取り巻く文脈（コンテキスト）を，従来とは違った形で問題化する理論群（下村，2008）」を指す。すなわち，従来のキャリア発達理論が，個人の置かれた環境的な条件や社会経済的な制約とは無関係に，各人が自由にキャリアを構想できる存在として，いわば「脱文脈化」されていた（Gothard, Mignot, Offer, & Ruff, 2001）点を問題とし，選択は本人の一存のみでは決まらないことを強調する理論である。

社会的文脈に埋め込まれながら，個人が進路選択を繰り返していくのであれば，キャリア発達を考えるにあたり，主体的な個人（human agency）と社会的文脈（social context）の双方を考慮することが重要であるといえる。

## ４．本研究の目的

先述の議論をふまえ，日本における学校から職業への移行という課題に関して，１）個別の移行プロセスに目を向ける，２）わが国独自の文脈をおさえるという２点をふまえた研究が必要であると考えられる。そこで本研究では，学校から職業への移行場面を焦点化するにあたり，小方（2008）の指摘した日本的な移行モード，つまり大学受験と就職活動という２つの移行場面に着目することにした。さらに，個人の移行プロセスを記述するため，就職活動を終えた大学生を対象にインタビュー調査を実施するという方法を用いることとした。

選択と適応は日々繰り返される。よって事前に行われた選択や選択に至るプロセスは，後の適応やその後の選択にも影響を与え，その様式は生涯にわたり繰り返されるということがいえるだろう。

学習理論の観点からは，人間が学習し続ける存在である限り，新奇な出来事に対処する際，これまでの自身の学習経験を反映させることがいえる。したがって後続の選択場面で用いられる選択様式は，以前の選択場面で用いられた選択様式の影響を受けるはずである。とりわけ，過去に個人によい結果をもたらした選択様式は強化されるため，類似した選択場面に直面した際，その個人は再び同じように意思決定を行うことが予測される。仮に結果が望ましいものではないとしても，何かしら個人がその経験から気づきを得たとするならば，個人は積極的に自己の選択様式を調整するだろう。

また，文脈理論の観点からは，個人が主体的に選択をしていたとしても，それら選択が社会文化的な要因に大きく影響を受けているとの示唆が得られる。とりわけ日本においては，大多数の学生が「一般的なレール」に乗っているようにみえる現状から，日本の社会構造が個人の意思決定に与える影響は大きいものと考えられる。

本研究では，日本の移行場面の特徴と，これら２つの理論的観点から，日本人大学生のキャリア選択の様式の特徴を捉えることを目的とす

る。また,「２つ以上の出来事（events）をむすびつけて筋立てる行為（emplotting）（やまだ, 2000）」（p.3）と定義される「物語」をインタビューという方法で得ることで, 学生のおかれている心的現実の把握を試みる。

## 方法

### １．対象者

2012年に就職活動を終了し，内定を獲得した計17名（男性10名，女性７名）にインタビューを実施した。対象者の属性を表１に示す。所属学部は文系，理系のどちらもが含まれた。平均年齢は22.94歳（*SD*=0.9）であった。

表１　対象者の属性

| 対象者 | 大学 | 所属学部 | 年齢 |
|---|---|---|---|
| 女性Ａ | 私立 | 文学部 | 22 |
| 男性Ｂ | 私立 | 経済学部 | 23 |
| 男性Ｃ | 私立 | 経済学部 | 22 |
| 男性Ｄ | 私立 | 文学部 | 24 |
| 男性Ｅ | 私立 | 経済学部 | 23 |
| 男性Ｆ | 私立 | 文学部 | 23 |
| 男性Ｇ | 私立 | 経済学部 | 22 |
| 女性Ｈ | 私立 | 文学部 | 22 |
| 男性Ｉ | 私立 | 文学部 | 24 |
| 女性Ｊ | 私立 | 文学部 | 22 |
| 女性Ｋ | 私立 | 文学部 | 22 |
| 男性Ｌ | 国立 | 法学部 | 23 |
| 女性Ｍ | 私立 | 農学部生命科学科 | 24 |
| 女性Ｎ | 私立 | 文学部 | 24 |
| 男性Ｏ | 私立 | 文学部 | 23 |
| 女性Ｐ | 私立 | 総合科学研究科 | 24 |
| 男性Ｑ | 私立 | 創造理工学研究科 | 24 |

## ２．調査期間

2013年１月上旬から３月下旬であった。

## ３．手続き

調査対象者は，進路が決定した大学４年生，修士２年生を募集した。調査に先立ち，話したくないことは無理に話さなくてよいこと，いつでもインタビューは中断可能であることなど，対象者から研究への協力についてインフォームドコンセントを得た。

各対象者にはインタビュー前に，質問紙と個人の経験を数直線として表すプロセスシートへの記入を求めた後，半構造化面接を行った。質問内容は，１）大学の選び方，２）大学の受験の仕方，３）就職活動の仕方についてであった。

インタビュー時間は約１~２時間であり，各対象者の承諾を得て，ICレコーダーへの録音を行った。

## ４．分析の視点

受験期と就職活動期という２つの時期を設けた。一度就職活動を行ったあと，時期をあけて再び就職活動を行った者については，就職活動の実施時期ごとに発言を記載した。

# 結果と考察

各対象者における大学選択，就職活動に関する発言を抜き出し，そこで用いられている選択様式の類似点，相違点について検討した。紙幅の関係で全ての対象者の逐語を載せることはできないため，以下に代表的なケースをとり挙げて結果を示した。次に，各ケースを引用して考察を行った。

## １．各対象者の発言

（１）男性Cの場合

男性Cの発言を表２に示す。

大学を選択するにあたり，男性Cは「（学部は）どこでも良かった」「ただ単に大学名にこだわって決めた」という決定の様式をしていた。大学受験は「とにかく大学名が欲しくて，学部はその二の次三の次」であり，「受けるだけ受けて」という多数の大学を受けるという方略をとった。

就職活動においては，「とにかく内定を１つとる」という目標を掲げ，その理由として「受かったっていう安定が欲しかった」こと，「やりたいことが一切なかった」ことを挙げた。「何にもここがいいってものがなさ過ぎて，悩みもあった」ものの「やりたいことがないからといって，就活をストップさせるって選択肢が俺にはな」かったことから，「嘘八百を並べて」志望動機を書くという行動をとった。エントリーシート（以下，ESと表記）については「数撃ちゃ当たるレベルの感覚でいたから，人よりかは相当出してる。」と述べ，多数の企業を受けるという方略をとった。

男性Cは大学受験時，「とにかく大学名が欲しくて，学部はその二の次三の次」で，多数の大学を受験したという特徴があり，就職活動時は「とにかく内定を１つとる」ため多数の企業を受けたという特徴から，合格や内定を得るために数を撃つという点で，選択の様式は類似していた。さらに，Cには学部の希望がなかったこと，就職活動時でも「やりたいことが一切なかった」ことから，Cは自身の「やりたいこと」がみえないまま，移行場面に臨んでいたという点でも共通していた。

表２　男性Cの発言

【大学の選び方】
（学部は）どこでも良かった。でも文学と，あとまぁ勿論理系はちょっと違う，っていうだけであって，法学部であろうとも経済であろうとも，例えばカタカナのよくわかんない学部でもどうでも良くて，ただ単に大学名にこだわって決めた，っていうだけ。（中略）〈私立大学名〉でも〈私立大学名〉でも〈私立大学名〉でも，とにかく大学名が欲しくて，学部はその二の次三の次。

【大学の受験の様式】
受けるだけ受けて。（学部に関しての希望）は。ない。（中略）受かった中で駅とか行って，人が少ないところ選ぶ，みたいな。

【就職活動】
あー，とにかく通る。あ，どっかこの会社嫌だなぁって思ってても（目標は）とにかく俺は内定を１つ取ること。（その理由は）２つあって，１つは，俺は絶対的な安定感，安定が欲しかった。受かったっていう安定が欲しかった。のと，やりたいことが一切なかった。ここでなければならないっていうものがなかった，から，どこから貰っても，おぉ，うん，ぐらい。（こだわりは）全くなくて。ま，同時に悩んで，すごく悩んで，何にもここがいいってものがなさ過ぎて，悩みもあった。（中略）志望動機。嘘八百を並べて。大変だった。（中略）やりたいことがないからといって，就活をストップさせるって選択肢が俺にはなくって。（エントリーシートは）いっぱい書いて。数撃ちゃ当たるレベルの感覚でいたから，人よりかは相当出してる。

（２）男性Gの場合

男性Gの発言を表３に示す。

大学を選択するにあたり，男性Gは「実学的な･･･，将来出て，なんかちょっと役に立ちそうな学問学びたいなと思って法学部目指してた」という，学部を絞った決定をしていた。本命は法学部であったが「ついでに経済も受けよう」と経済学部も受験した結果，「法学部落ちちゃったんで，経営，経済でいいやって経済」というように，最終的には経済学部を選択することになった。大学受験は「大体10個ぐらい」を受験し，「自分なりに，多くは選んだつもり」と多数の大学を受験した。「高校の時は･･･全然勉強してな」い状態であったが，「受験でようやく勉強するようになって･･･結構勉強すると･･･自分のこう身についてる感じがあって，役に立ってんだなっていうのわかった」ことから，「大学こそちょっとやってやろうって気持ちで，っていう意気込みはありました」というモチベーションを持つに至った。

就職活動においては，「金融関係っていうのはちょっと漠然と一つの括りで決めて」，活動を開始した。しかし，「自分は本当に特段優れたところもなかったんで，企業からそんなに求められるものでも，人材でもない」との自己評価から，「取りあえず数撃って，尚且つ数撃って当てるように」「取りあえずたくさん受けて，その中の一つ一つ最大限努力して，一つでも多く取ってやろうって気持ちで」活動をした。具体的な活動レベルでは，「（初めから志望の業界以外の説明会には）あんま行ってなかった」という特徴があり，その理由として「本当に金融が一番なんか，自分の目指してるとこに合う」と感じたこと，「金融業界って･･･説明会の重視してる度合いが高いらしいんで，そういった意味ではちょっと，多く出とかないと，その他の業界で割くんだったらここで行っとかないと，いけないのかなっていう，部分があった」ことを挙げた。

男性Gは大学受験時，「役に立ちそうな学問」という括りで学部を絞り，多数の大学を受けるという方略をとった。また，就職活動時は金融関係を「漠然と一つの括りで決めて」多数の企業を受けるという方略をとったことから，自身の興味で選択の幅を定め，その範囲で数を撃つという

点で，選択方略は一致していた。

表３　男性Gの発言

【大学の選び方】
最初は，僕自身法学部を目指してたんですけど，まぁもう一つあの正直実学的ななんてゆうか，将来出て，なんかちょっと役に立ちそうな学問学びたいなと思って法学部目指してたんですけど，まぁあの，たまたま，ま，ついでに経済も受けようということで，（中略）経済２つだけ受けたら，まぁ〈私立大学名〉経済が受かって，法学部落ちちゃったんで，経営，経済でいいやって経済いきましたね。（中略）高校の時はそう，全然勉強してなくて。で，受験でようやく勉強するようになって，であぁ結構勉強すると，なんか自分のこう身についてる感じがあって，役に立ってんだなっていうのわかったんで，で大学こそちょっとやってやろうって気持ちで，っていう意気込みはありました。

【大学の受け方】
あぁー正直，ま大体10個ぐらいだったんですけど，なんか他の受験生を知らないんで多いのか少ないのかわかんないんですけど，大体，んー，自分なりに，多くは選んだつもり。

【就職活動】
僕は漠然とちょっと金融関係，ただ経済学部で勉強もしてたし，さっき言ったようにFP（ファイナンシャルプランニング）みたいので，ちょっと面白いなっていう興味もあったんで，なんかその金融関係っていうのはちょっと漠然と一つの括りで決めてました。（中略）取りあえず僕が思ったのが，なんか自分は本当に特段優れたところもなかったんで，企業からそんなに求められるものでも，人材でもないと思ったんで，ま取りあえず数撃って，尚且つ数撃って当てるようにはしましたね。当た

るっていうか，なんていうか当てるように。取りあえずたくさん受けて，その中の一つ一つ最大限努力して，一つでも多く取ってやろうって気持ちでやりました。（中略）（初めから志望の業界以外の説明会には）あんま行ってなかったですね。（中略）いやー，なんか，本当に金融が一番なんか，自分の目指してるとこに合うのかなっていうのと，あんま金融業界ってその，説明会の重視してる度合いが高いらしいんで，そういった意味ではちょっと，多く出とかないと，その他の業界で割くんだったらここで行っとかないと，いけないのかなっていう，部分があったんで。

（３）男性Lの場合

男性Lの発言を表４に示す。

大学を選択するにあたり，男性Lは「特に法律がしたいからっていう訳でなくて･･･悪く言えばブランド力がある的な感じで選びました。一番上にあるから，みたいな感じで。」という決定をした。大学受験は希望の大学を「１こだけ」受験した。

彼は１年間の留年を経て，就職活動に臨んだ。就職活動においては，「そういうものだと思ってたので，特にそこに違和感ということを感じずにまぁそのまま来てしまったっていう感じ」から，進路選択のプレッシャーはなかった。「発電所とか当時･･･地震前に･･･大学２年の時に思ってたんですけど，原発作りたいなって思ってて･･･そういうのが出来るようなおっきい電気系のメーカー行きたいなぁ」との考えを持っており，第１志望はメーカーであった。第２志望の商社については「飾りで受けたぐらいの感じ」であった。具体的な活動レベルではOB訪問をしており，「第一希望に関しては，そういうのをちゃんとしておこうっていうのは思ってましたし，あと商社ってしなきゃいけないって良く言われてたので･･･悪く言えば仕方なくやったっていう感じ」と述べた。活動に関して，Lは大学在学中に１年間の留年を経験しており，「自分が１年ハンデを

抱えている分，そのハンデを乗り越えなきゃいけないな」という心持で就職活動に臨んだと述べた。選択の様式については「いろんな会社を見て絞っていくってことはせずに･･･最初から決めていて説明会で思いを“ここでいいのか？”みたいなのを判断して，削るっていうのが基本でした。ここで増やすってことはなかったし，でも削るってのも１こ２こしかなかったんで。」と，当初から選択肢を固定していた。

男性Lは大学受験時，「一番上にある」「ブランド力がある」という括りで大学を定め，希望する大学のみを受けるという方略をとった。また，就職活動時は志望を「最初から決めていて」，その後の志望，志望企業数の変更がほとんどなされなかったことから，選択方略は一致していた。しかし，「飾り」として自身の本来の希望からは外れる商社を志望に入れ，OB訪問を「仕方なくやった」点は，希望の大学１つのみを受験した大学受験とは異なっていた。

表４　男性Lの場合

【大学の選び方】
えっと，高校ぐらいから，えーと出来るだけいい大学っていうか，ずっと〈国立大学名〉行きたいなぁみたいなって，法学部行きたいなと思ってたので，特に法律がしたいからっていう訳でなくて，ま，一番，悪く言えばブランド力がある的な感じで選びました。一番上にあるから，みたいな感じで。

【大学の受け方】
１こだけです。

【就職活動】
（進路選択のプレッシャー）ないですね，別に。そういうものだと思ってたので，特にそこに違和感ということを感じずにまぁそのまま来てし

まったっていう感じ。
（希望の進路は）そうですね。こう行きたいなぁっていうのはありました。まぁ結局その会社に入れたんですけど，ま発電所とか当時，えーと地震前に，大学２年の時に思ってたんですけど，原発作りたいなって思ってて。ま文系ですけど。で，そういう思いがあってそういうのが出来るようなおっきい電気系のメーカー行きたいなぁと思ってました。でまぁ地震とかあって多少軌道修正はするんですけど，まぁ基本は変わらなかったですね。（中略）（第１志望はメーカーで第２志望が商社）いやあ…（商社は）飾りで受けたぐらいの感じです。自分の中では。（OB訪問は）そうですね，やっぱり第一希望に関しては，そういうのをちゃんとしておこうっていうのは思ってましたし，あと商社ってしなきゃいけないって良く言われてたので。商社はそんなに自分の中で受けたい，行きたい企業ではなかったんですけど，まOB訪問しなきゃ受からないって思ってたので，悪く言えば仕方なくやったっていう感じだと思います。（中略）（活動については）やっぱり，うーん，自分が１年ハンデを抱えている分，そのハンデを乗り越えなきゃいけないなとは思ってました。だからまぁ，その就職浪人とかすることはないだろうとは思ってましたけど，その行きたいところ行くにはまぁちゃんとした努力はしなきゃいけないなっていうことは思ってました。（中略）（志望は）そうですね，結局最初から変わらずでしたね。はい。ずっと思ってたことを12月ぐらいではっきりさせたっていう感じで。その，いろんな会社を見て絞っていくってことはせずに，その，最初から決めていてここ説明会でまぁ思いを“ここでいいのか？”みたいなのを判断して，ま削るっていうのが基本でした。ここで増やすってことはなかったし，でも削るってのも１こ２こしかなかったんで。

（４）男性Qの場合

男性Qの発言を表５に示す。

大学を選択するにあたり，男性Qは「中学生高校生ぐらいから環境問題に関心」を持っていたことを挙げた。さらに「先生に，まず言われるがままっていうのが一つで」「オープンキャンパスとかも行かなかったから，その偏差値とか，だけを見てた」という選び方をした。大学受験については「浪人する気満々」で，「名門校で，その環境に関する学科があるっていうところ」という条件で絞り「（この２つ以外は）受けて，ない。」ことから受験数は２つだった。結果的には２つの大学のうちの私立大学に進路は決定したが「一応その国立志望で，結局その私立に行くことにしたから･･･あとはその〈国立大学名〉よりはちょっと偏差値が低めっていう認識があったからその分いい成績目指そうっていう，モチベーションは持った。」という意識を大学入学時に持っていたと振り返った。

男性Qは大学３年生で一度就職活動を行い，その後大学院に進学した後，修士１年生で再び就職活動を行った。以下にそれぞれについて述べる。

①学部３年生時の就職活動

男性Qは高校生の時点から「周りと同じことをするのがすごく嫌い」であり「〈男性Qの出身高校名〉だとみんな〈国立大学名〉って言うから，じゃあ俺〈男性Qが受験した国立大学名〉っていう感じ」というように進路を選択した。それをふまえた上で，学部３年生時には「理系の学部生っていうとみんな大学院行くみたいなのがもうデフォルトになってて。周りに訊くとみんな『俺大学院行くから』っていうことで就活はしない。･･･大学院行くのが，レールなのかもしんないけど，最終的に就職ってこと考えたら，それはただ考えるのを後回しにしてるだけで，別に今（就活を）やること，は絶対プラスになるはずだ」という思いから就職活動を開始した。さらに「私立っていうのもあってもう大学院にはほぼ自動的に，行けるから，その就活してもしなくても大学院には行ける」と考え「（プレッシャー）は全くなかった」が，「意識を持って大

学院に行くのと，ただなんとなく行くのとでは絶対その２年間の過ごし方が違うと思ったから」との考えも，Qを就職活動に至らせた理由として挙げられた。しかし,「（進路）は決まらなかったから，旅行に。そう，自分探しの旅に行くことになる（笑）」とあるように，学部３年生時の就職活動で進路は決定しなかった。自分探しに至った理由として「就職ってもう，それでほとんど将来決まることだから，そんなことを今何も知らないこんな状態で狭い視野の中で決めちゃって本当に自分の能力活かしきれてんのかなとか。まず世界広げなきゃダメだろって，なって。で幅広い選択ん中から，選べるようにならんといかんと。」と述べた。

②修士１年生時の就職活動

修士１年生で再び就職活動をすることにしたQは,「あんまり受けなかったから時間があったのもそうだし･･･一応，研究室に所属していて，先生との･･･信頼関係もあるわけだから，そこをちょっと就活でストップするっていうのは，違うかなっていう」考えから,「就活になると就活しかやらなくなる人結構多いんだけど･･･就活をメインにはしなかった」と語った。具体的な活動レベルとしては,「自分で決めてたのが,“行きたい”と思わない会社は出さない。ESは。っていうのと，あと内定を貰ったら，貰った場所に行く。っていう風に決めてて」というように，自身のルールを定めていた。特にESについては「10社出すのと，５社出すのだと，やっぱり取れる時間が倍違う，わけでなんか，それだけESも一生懸命書けるし，なんかその会社への愛情というか気持ちも高まるから」という理由から「どこに行っても本当にいいなって思えるような会社に，しかESは出さなかった」という自身のルールに従った行動をしていた。さらに，受ける企業数を絞ることのリスクについては,「（受ける企業は）多くなるほうがリスクあるって感じてたから。うん。それがやっぱり一つ一つへの思いが小さくなるし，･･･その志望度がそこまで高くないところでも受ける，っていう風になると，それ，その気

持ちが，やっぱり隠し通せるものじゃないし，面接でもESでもなんか，合間合間見えてきちゃうから，それは結局，あのー面接で落とされる材料になるわけで，それってーのは結局･･･落ち込む要因にもなるし，自分の就活への恐怖心だったり，そういうモチベーション下げることにも繋がると思うから，だったら本当に行きたいところだけ，ていう風にやった方が俺はいいかなっと」述べた。

以上を要約すると，男性Qは大学受験時において，「名門校で，その環境に関する学科がある」という条件で選択肢を絞り，希望する大学のみを受けたが，同時に，その選択の様式を「先生に言われるがまま」「偏差値とかだけを見て」と評価した。１回目の就職活動時は，就職が「ほとんど将来決まること」であるため「今何も知らないこんな状態で狭い視野の中で決めちゃって本当に自分の能力活かしきれてんのかな」「まず世界広げなきゃダメだろ」と考え「幅広い選択ん中から，選べるようにならんといかん」と選択の幅を広げようと試みた。２回目の就職活動時には，希望する企業にのみESを出すという自身のルールを定め，それに従って就職活動を行った。

男性Qがいずれの移行場面でも共通して有していたのは「周りと同じことをするのがすごく嫌い」という志向性と，環境問題への関心であった。選択方略は自身が希望する大学ないし企業のみを絞り込んで受けるという点で一致していた。しかし，１回目の就職活動での選択の幅を広げようとの試み，２回目の就職活動でルールを「自分で決めて」活動を行うという方略は，大学受験時の「先生に言われるがまま」という方略とは異なるものであった。

表５　男性Qの場合

| |
|---|
| 【大学の選び方】<br>えっと学部の時は環境資源工学科っていう。もうほとんど同じ。元々はその環境っていうところに興味があって，そのこう，ま中学生高校生ぐ |

らいから環境問題に関心があって，そこを選んだ。《なぜ》ちょうど地球温暖化とかが騒がれ始めてた時で，なんだろう，何か，将来仕事に就くとかなった時に，この世にインパクトのあるというか何かいいことをっていう単純な考えから，環境問題に興味を持ちました。大学の選び方は，本当に，なんだろう，先生に，まず言われるがままっていうのが一つで。単純にそのオープンキャンパスとか，オープンキャンパスとかも行かなかったから，その偏差値とか，だけを見てたっていうのと，あとは，なんだろう，上昇志向が当時強かったから，あのー，やるからにはトップ校目指そうみたいな方向で，その大学選びをしてた。（中略）一応その国立志望で，結局その私立に行くことにしたから，その分，なんだろう，あとはその〈国立大学名〉よりはちょっと偏差値が低めっていう認識があったからその分いい成績目指そうっていう，モチベーションは持った。

【大学の受け方】

（受験数）は，えっと〈国立大学名〉と〈私立大学名〉の２つ。もう，浪人する気満々で。（２つに絞った理由）は，えっとその名門校で，その環境に関する学科があるっていうところ。（この２つ以外は）受けて，ない。

【就職活動】

①学部３年生時の就職活動

えっとー，周りと，周りと同じことをするのがすごく嫌いで。その〈男性Qが受験した国立大学名〉も実はそうで。〈男性Qの出身高校名〉だとみんな〈国立大学名〉って言うから，じゃあ俺〈男性Qが受験した国立大学名〉っていう感じ。もう環境っていうのもあったけど，ていう感じの人間で。あのー，なんだ理系の大，理系の学部生っていうとみんな大学院行くみたいなのがもうデフォルトになってて。で周りに訊くとみん

な『俺大学院行くから』っていうことで就活はしない。なんだけど，別に，その，大学院行くのが，レールなのかもしんないけど就，最終的に就職ってこと考えたら，それはただ考えるのを後回しにしてるだけで，別に今（就活を）やること，は絶対プラスになるはずだって思って。（プレッシャー）は全くなかった。その私立っていうのもあってもう大学院にはほぼ自動的に，行けるから，その就活してもしなくても大学院には行けると。うん。ただそのー，就活をして，自分がこういう，勿論そこでいいところ，てか自分の行きたいところが定まってそこに決まれば，行ったらいいし，そこでもまだわかんない，でそのなんか原因とか，ももうちょっと考えなきゃいけないって時にその，意識を持って大学院に行くのと，ただなんとなく行くのとでは絶対その２年間の過ごし方が違うと思ったから。（進路）は決まらなかったから，旅行に。そう，自分探しの旅に行くことになる（笑）《自分探し》なんか，理想の，この，なんつんだろう，就職ってもう，それでほとんど将来決まることだから，そんなことを今何も知らないこんな状態で狭い視野の中で決めちゃって本当に自分の能力活かしきれてんのかなとか。まず世界広げなきゃダメだろって，なって。で幅広い選択ん中から，選べるようにならんといかんと。

②修士１年生時の就職活動

えっと一応自分で決めてたのが，“行きたい”と思わない会社は出さない。ESは。っていうのと，あと内定を貰ったら，貰った場所に行く。っていう風に決めてて。だから，どこに行っても本当にいいなって思えるような会社に，しかESは出さなかった。《絞る》うーん，まそもそも，なんだろうな，説明会，に出したのも少なかったんだけど，でもそれ少ない理由って言われてもなかなか難しいんだけど，ズボラだったのもあるし。あるし，まあとは世間の評判。でやっぱ企業のその説明会は選んでて。で，や，説明会に行った中で，自分に合ってるなって思えた会社，

だけ出した。（中略）就活になると就活しかやらなくなる人結構多いんだけど，一応その就活，就活をメインにはしなかった。ま単純に時間もあっ，あのあんまり受けなかったから時間があったのもそうだし，なんだろう，一応，研究室に所属していて，先生との，なんだろう，信頼関係もあるわけだから，そこをちょっと就活でストップするっていうのは，違うかなっていう。やれることはやってこうっていう。（中略）やっぱ一社，10社出すのと，5社出すのだと，やっぱり取れる時間が倍違う，わけでなんか，それだけESも一生懸命書けるし，なんかその会社への愛情というか気持ちも高まるから。《リスク》俺は，（受ける企業は）多くなるほうがリスクあるって感じてたから。うん。それがやっぱり一つ一つへの思いが小さくなるし，あのーやっぱり，その志望度がそこまで高くないところでも受ける，っていう風になると，それ，その気持ちが，やっぱり隠し通せるものじゃないし，面接でもESでもなんか，合間合間見えてきちゃうから，それは結局，あのー面接で落とされる材料になるわけで，それってーのは結局，あのー，落ち込む要因にもなるし，自分の就活への恐怖心だったり，そういうモチベーション下げることにも繋がると思うから，だったら本当に行きたいところだけ，ていう風にやった方が俺はいいかなっと。

## ２．考察

大学受験と就職活動という２つの移行場面における各ケースの特徴を取り上げながら，以下に移行場面におけるキャリア選択の特徴について述べたい。

男性Cは自身の希望がないまま多数の大学や企業を受ける，男性Gは大きな括りで選択の幅を定めてその中から数撃って当てる，男性Lは初期に自身の進むべき進路を定め，そこから希望をほとんど変化させない，男性Qは希望を絞り込み，少数を受けるという選択様式であった。いず

れのケースも大学受験時に用いた選択様式が，就職活動時にも共通して用いられていたことから，大学受験時に用いられた選択様式が，就職活動時の選択様式として再びたちあらわれるという特徴があるといえる。

また，従来の選択の様式を基として変化が見られたと思われる男性L，Qに注目してみよう。男性Lについては，希望の大学１つのみ受験した大学受験とは異なり，「飾り」と表現する商社を志望に入れ，「仕方なく」OB訪問をしていた。彼は１年間の留年という「ハンデ」を乗り越えるべく，これら活動に従事したことがいえる。また，男性Qについては，１回目の就職活動での選択の幅を広げようとの試みが大学受験時とは異なっており，２回目の就職活動でルールを「自分で決めて」活動を行うという選択様式も，大学受験時の「先生に言われるがまま」というそれとは異なるものであった。進路選択に際し，「周りと同じでいいのか」という社会文脈への気づきや，「自分はこれでいいのか」という自身への気づきが，行動する個人の主体の程度を増幅させたものと考えられる。ここに，個人のキャリア発達がみてとれるといえる。

また，個人が文脈に埋め込まれていることを示す発言もあった。例えば，大学受験に際し，男性Qは「先生に，まず言われるがまま」大学受験に臨んだという。さらに，就職活動という進路選択場面に際し，男性Lは「そういうものだと思ってたので，特にそこに違和感ということを感じずにまぁそのまま来てしまったっていう感じ。」と述べている。これら発言から，個人にはある時期がくれば進路を選択することは当たり前であるという認識があるように思われ，個人が自ら進路選択に向かっているというよりは，自動的に進路選択をするように運ばれているというような印象を受ける。また，就職活動に従事する段階に注目すると，男性Cは「やりたいことがないからといって，就活をストップさせるって選択肢が俺にはなくって」と述べている。「やりたいこと」を求めることの是非はともかく，自身と向き合う上で，一度就職活動を離れてみるなどの選択肢も本来はあり得たはずである。しかし，彼には就職活動

を継続する以外の選択肢がないことがみてとれる。これらは，日本固有の文脈が反映されている発言と捉えられる。すなわち，おおよそ３年生の秋に開始されるという就職活動の公的な開始，卒業後すぐに就職するという日本的な「移行モード」が彼らにこのような意識をもたらしていると考えられる。

## 総合考察

本研究の目的は，大学受験と就職活動という２つの移行場面において，日本人大学生のキャリア選択の様式にはどのような特徴があるかを検討するものであった。いずれのケースも大学受験時に用いた選択の様式が就職活動時にも共通して用いられていたため，大学受験時に用いられた選択の様式が，就職活動時の選択の様式として再びたちあらわれるというキャリア選択の特徴がみえた。では，この異なる２つの移行場面で，なぜ同じような意思決定パターンが繰り返されたのだろうか。本稿では，大学受験と就職活動の構造の類似点に言及した後，学習理論と文脈理論の立場による考察を試みる。

意思決定パターンの類似についての説明をするにあたり，その意思決定がなされた場面に共通の要素を抽出する必要があると考えられる。よって，以下に大学受験と就職活動の類似点を挙げていく。

第一に，両場面は一種の達成場面と捉えることができる。すなわち，合格や採用といった達成に向けた行動が必要とされる状況である。さらに，どちらも定員という枠の中で相対評価がなされるため，いかに個人が努力しようとも，合格や採用といった結果に必ずしも結びつかないという点で共通しているといえる。

第二に，目標を達成するための目的－手段関係が多様であることである。つまり，ある人にとっては，合格や内定が目的にも手段にもなりうるということである。例えば，男性Cのように合格や内定が「ブランド

名が欲しい」「内定ひとつとにかく欲しい」という目的として機能する場合と，男性Gのように「将来役に立つ学問を学ぶため」「自分の目指してるとこに合う」という手段として機能する場合がある。

第三に，次の段階への移行を規定する意思決定場面であるがゆえに，評価に関わりやすいということである。大学受験においては特に学力が，就職活動においては能力のみならず，評価規準の曖昧な性格特性やコミュニケーション能力までもがその評価の対象となる。両場面で評価される対象の違いはあるものの，そこでの結果は，個人が自身に下す評価のみならず，他者がその個人に与える評価に多大な影響を及ぼすものと推察される。

以上の点から，大学受験と就職活動という２つの移行場面には類似点があるといえる。では，これらをふまえた上で，学習理論と文脈理論の観点から考察をしていこう。

学習理論の立場にたつと，キャリア意思決定は学習とされる。よって，両場面の選択の様式も学習の結果であると考えられる。過去に個人によい結果をもたらした選択様式は強化され，その個人は再び同じ選択様式で決定をおこなうことが予測される。その意思決定場面が，上述したような類似したものであれば尚のことである。今回の調査対象者は大学生であるため，第一希望の大学ではないかもしれないが，合格という成功体験を得ている者だといえる。したがって，就職活動という新奇場面においても，大学受験において合格というよい結果をもたらした選択様式が強化されたため，同じような選択様式が採用されたと考えられるだろう。

次に，文脈理論の立場にたつと，キャリア意思決定は本人の置かれている社会文脈に多大な影響を受ける。本研究の結果から，学生にとって次の段階への移行は「そういうもの」であり，当然であるとの認識があると考えられる。さらに進学や就職といった進路選択が，教師，親，友人といった他者によっても当然のごとく共有されていることが，進路選

択をする主体にその移行への「違和感」を感じさせなくなる要因にもなっていると推察される。この文脈は，ひいてはその進路を選択する以外の選択肢がないという学生の心的現実につながり，個人のキャリア選択が制限される恐れがある。小方（2008）は教育社会学の観点から，「高卒直後に進学するという日本的な移行モードは，大卒直後に就職するという移行モードにつながる」（p.35）ことに言及した上で，この構造に変化がない限り，大学から職業への移行には日本特有の文脈があり，常に課題であり続けると主張する。日本において大学受験と就職活動という場面の構造が類似している以上，それが個人の心的過程にも大きく反映されているものと考えられる。したがって，これら２つの移行場面における類似の社会構造が，両場面における個人のキャリア選択様式を類似したものにしたとの解釈が可能である。

以上から，キャリア支援を考えるにあたり，社会や文化という大局的な視点と，個々人の特殊性という個別の視点の双方をもつことは重要である。さらにそれら視点は，実証研究による知見から提示されることが望ましい。個人の語るストーリーは，個人が自分自身や自身の置かれている状況をいかに評価しているかを把握するのに有用な方法であろう。その点で今回の研究は意義があったといえる。

キャリアはその独自性ゆえに，複雑なパターンを呈することが考えられる。しかし，そこに共通のパターンを見出すことは不可能ではないと考えられるし，そのようなパターンを抽出することが，新たな支援を提示することにもつながると考えられる。今後，さらなるキャリア発達について多角的なアプローチが期待される。

## 要約

本研究の目的は，大学受験と就職活動という２つの移行場面において，日本人大学生のキャリア選択の様式にはどのような特徴があるかを検討

するものであった。インタビュー調査の結果，いずれのケースも大学受験時に用いた選択様式が就職活動時にも共通して用いられていたため，大学受験時に用いられた選択の様式が，就職活動時の選択の様式として再びたちあらわれるというキャリア選択の特徴がみえた。日本において，大学受験と就職活動の構造が類似点している点を鑑み，今後キャリア支援を考えるにあたり，社会や文化という大局的な視点と，個々人の特殊性という個別の視点の双方をもつことは重要であることが示唆された。

## 付記

本研究にご協力くださいました皆様と，本論文執筆にあたりご指導くださいました伊藤忠弘教授に，心より御礼申し上げます。

## 引用文献

Carole W. M.（1992）. Career Development Theories and Models. Lea, H. D., & Leibowitz, Z. B.（Ed.）Adult career development: Concepts, issues, and practices. National Career Development Association. pp.17-41.

Gothard, B., Mignot, P., Offer, M. & Ruff, M.（2001）. Career Guidance in Context, London:Sage.

濱中義隆（2007）. 現代大学生の就職活動プロセス　小杉礼子（編）大学生の就職とキャリア「普通」の就活・個別の支援　頸草書房　pp.17-49.

日本労働政策研究・研修機構（2007）. 大学生と就職――職業への移行支援と人材育成の視点からの検討――労働政策研究報告書,78.

Jepsen, D. A., & Choudhuri, E.（2001）. Stability and Change in 25-Year Occupational Career Patterns. The Career Development Quarterly, **50**, 3-19.

小方直幸（2008）. 大学から職業への移行をめぐる日本的文脈　山内乾史（編）. 教育から職業へのトランジション：若者の就労と進路職業選択の教育社会学

東信堂　pp.32-44.
下村英雄（2008）. 最近のキャリア発達理論の動向からみた「決める」について（<特集>「決める」）. キャリア教育研究, **26**, 31-44.
渡辺三枝子 (2007) . 新版キャリアの心理学　キャリア支援への発達的アプローチ　ナカニシヤ出版
やまだようこ (2000) . 人生を物語る――生成のライフストーリー　ミネルヴァ書房

# A Study of Career Decision-making Strategies in Transition

KOSUGE, Sayaka

The aim of this study was to analyze the career decision-making strategies of Japanese university students. The results indicated most of the participants used the same career decision-making strategies at university admission and job-hunting. From the conceptual point of view, the empirical study was supported by the theories related to the human development, conceptual theory as well as theories of Krumboltz's theory of learning approaches. This study has the possibility of building psychological and educational interventions for Japanese university students.

（心理学専攻　博士後期課程１年）